

英傑・金子与三郎

東北芸術工科大学 芸術学部文芸学科 教授
石川 忠司

日本史上の人物で東北出身といえど真っ先に誰を思い浮かべるだろうか？伊達政宗。最上義光。上杉鷹山。松平容保。石原莞爾etc……。なるほど、そのあたりは超有名人だから当然にしても、そんな彼らに優に匹敵する英傑・金子与三郎の知名度がまだまだ低いのは残念なことである。

しかしかくいう自分も、清河八郎 — 新撰組および新徴組の母体となった浪士隊の創設者 — の事跡を調べていて、偶然金子与三郎にいきあたったにすぎない。文久3（1863）年、清河が江戸麻布の一の橋で幕臣・佐々木只三郎に斬殺されたとき、直前に立ち寄っていたのが金子与三郎の邸であったのだ。

金子与三郎は幕末に影響を持った論客として異彩を放った上山藩の政治家・思想家・教育家である。諱は清邦。字は鳴卿。文政6（1823）年に生まれ、仙台の養賢堂（仙台藩の藩校）や江戸の昌平黉（江戸幕府の学問所）で学ぶ。広く日本全国を遊歴し、大槻磐溪、安井息軒、頼三樹三郎、清河八郎、山田方谷ら当代一流の学者・名士たちと親しく交わった。

藩内では藩校の明新館を大いにもり立てる一方、商人の搾取で生活苦に陥った農民を救済し、またゲバール銃その他西洋式の軍備の導入にも努める。彼の政治思想は水戸の徳川齊昭へ提出した『杞憂臆策』や、老中の板倉勝清に対して行った献策、および弟子が記録した言葉などからうかがえるだろう。

その骨子は以下の通り。当今のような未曾有の危機にさいしては、富国強兵によって国力を高め外夷に当たるべきであり、そのためには朝廷と幕府が一つになって、国内の人心を統一してかからねばならない……。

朝廷と幕府との協調を重視するいわゆる公武合体思想とっていいのだが、公武合体思想は一般的に幕府を中心とした国内勢力 — 朝廷もふくむ — の結集を説くのに対し、あくまでも朝廷中心の国内勢力結集を考えるあたり、むしろ長州の吉田松陰に近い。もしくは安政期の岩倉具視とくに。

しかし松陰にしろ岩倉にしろ、兎にも角にも強烈なイデオロギーとしての朝廷崇拝がまず頭の中に存在する。金子与三郎の場合は彼らとは異なり、冷静な現実認識から朝廷中心の公武合体が導かれるのであって、そのどこまでも合理的な明るい思考には驚嘆すべきだろう。

松陰には純粹さが、岩倉には実行力が、そして金子には「理性」が備わっているというわけだ。また將軍家茂に謁見 — 金子の評判をききつけたらしい — する機会を得ても、幕府におもねるのを潔しとせず固辞している。己の理念に忠実な人物でもあった。

慶応3（1867）年、薩摩の西郷吉之助がゴロツキを雇い江戸市中で狼藉を働かせて幕府を挑発。幕府は上山、庄内、鯖江の三藩に掃討を命じ、金子も参戦したが流れ弾に当たって戦死をとげた。享年45才。彼が生きていたら、のちの奥羽戦争はまた別の様相を呈していたとは衆目の一致するところだ。

石川 忠司（いしかわ・ただし）

東北芸術工科大学芸術学部文芸学科教授。1963年、東京生まれ。立教大学文学部ドイツ文学科卒。文芸評論家。1989年に「修行者の言語 中原中也試論」で群像新人文賞優秀賞受賞。著書に『極太!! 思想家列伝』（ちくま文庫）、『孔子の哲学』（河出書房新社）、『現代小説のレッスン』（講談社現代新書）、『衆生の倫理』（ちくま新書）、『新・龍馬論』（原書房）、『文学再生計画』（神山修一との共著、河出書房新社）などがある。